

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2024年2月

## 博士学位申請論文審査報告書

論文題目：複数言語環境で育つ高校生のリテラシーを育む日本語教育のあり方  
－「書く」ことの教育実践を通して－

申請者氏名：小林 美希

主査 池上 摩希子 署名 \_\_\_\_\_ 印  
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 蒲谷 宏 署名 \_\_\_\_\_ 印  
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小宮 千鶴子 署名 \_\_\_\_\_ 印  
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

## <本論文の概要>

本申請論文は、複数言語環境で育つ高校生のリテラシーに着目し、かれらのリテラシーを育てていくための日本語教育とはどのようなものかを探求した論考である。

申請者が継続的に実施した「書く」ことの教育実践を詳細に記述し、分析と考察を行った実践研究であることが特徴といえる。

本論文は序章と終章、本論として第1章から第9章までで構成されており、全255頁にわたる。

序章において研究課題の背景とおかれた文脈を述べてその重要性を指摘したうえで、第1章では問題の所在と研究課題を明確にしている。そして、本論文の重要なキーコンセプトである「リテラシー」について、概念の変遷とここでの捉え方を理論に基づいて説明しているのが第2章で、ここで「書く」ことに関する理論的な考察が行われている。

第3章では実践と考察の方法、また実践章である第4章から第8章までで取り上げている教育実践とインタビュー調査の概要と方法が示され、ここで、本論文の特徴である「実践研究」とは何か論じられ、規定される。

第4章から第7章は、申請者がJSL高校生に対して行った教育実践をもとに研究課題に迫る実践研究章である。各実践は申請者が教員として勤務する私立高校をフィールドに行われた。主に、「エピソード記述」をアプローチとして記述された実践記録を分析データとし、実践からの探求が進められている。

第4章では「技能特化学習」クラスにおいて展開された小論文を「書く」実践を通して、「言語重視」と「自己表現重視」を問い直した（〈実践研究①〉）。

続く第5章では、先行研究の知見を踏まえたうえで、この2つの視点がどのように関連しているかを考察している。分析対象としたのはコンテストへ向けてエッセイを書く授業実践と生徒が書いた文章、また、文章へのフィードバックもデータとした（〈実践研究②〉）。結果として、言語と自己表現の二項対立から脱却した「言語重視・自己表現重視」の実践が重要であることを主張した。

第6章は4章と5章を踏まえ、「トランスランゲージング」と「批判的リテラシー」といった理論的枠組みから教育実践の分析を行った章である。大学進学を目指す3年生のJSL生徒に行った「アカデミック・ライティング」の授業を対象に、実践記録と

生徒が書いた文章をデータとして分析を行い、リテラシーを多面的に捉えることの意義を問い直している（〈実践研究③〉）。

第7章においては、6章で示された観点に基づいてデザインされた教育実践と発表活動の分析を行い、複数言語環境で育つ生徒がリテラシーを伸ばしていく実践とは何かについて、考察を深めた（〈実践研究④〉）。

そして、第8章は、大学生になったかつてのJSL高校生に行ったインタビュー調査の分析と考察を行った章である。半構造化インタビューの内容を文字化したものをデータとし、SCAT(Steps for Coding and Theorization)により分析した。ここでは、第4章から第7章の実践章での考察と照応させながら、複数言語環境で育つ高校生のリテラシーを多面的に捉える意義を説いている。

第9章の総合考察は、実践研究を総括し、研究課題に答えるものである。終章ではその答えを踏まえ、序章で示した社会的文脈において、複数言語環境で育つ高校生のリテラシーを育てていくための日本語教育とはどのようなものかを俯瞰的に展望している。

#### <本論文の評価>

本論文は、「書く」ことの教育実践を通して、理論的な背景や根拠を押さえつつ、具体的な教育実践を丁寧に記述した実践研究論文として、高く評価できるものである。

年少者に対する日本語教育において、児童生徒に対する「書く」ことの指導には、既定の方法が存在するわけではない。言語項目の指導に偏りが見られたり、一方で日本語そのものを取り上げた言語要素の指導が避けられる「自己表現重視」の傾向も見られたりする。しかしながら、申請者は自身の日本語教育実践で生じた問題を直視し、理論的にも深く考察したうえで、改めて「言語重視」の観点を導入した。このように、実践を丁寧に積み重ね、そして、誠実に実践を改善していった点は実践研究として高く評価できる。

また、申請者が高校で日本語指導を行った生徒に対して、大学進学後もインタビュー調査を続け、学習者のなかで日本語や日本語学習の意味付けが変容する様子を具体的に記述した記録は、資料としても貴重なものである。こうした調査が実施できるこ

とは、フィールドとしての教育現場、そして、当事者である元生徒と申請者が長期にわたって良い関係を築き上げた成果といえ、調査研究を行う主体として評価される点であるといえる。

年少者に対する日本語教育のみならず、「書く」教育においては、「言語重視」、「自己表現重視」という点が、ともすれば、二者択一や二分法的に捉えられ、議論されてきた。しかし、本論文においては、単にどちらも重要だということではない、「言語重視・自己表現重視」という捉え方を提示し、リテラシーの総体としての「ことばの力」の育成として、何年にもわたる実践研究により追究し続けた点が評価できるといえよう。また、子どもの「成長・発達」というプロセスを動的に記述しているだけでなく、実践と省察が実践研究者としての教師にとっても自身の成長・発達につながるという点も記述されており、日本語教育学に対する重要な示唆となっていると思われる。

一方、JSL 生徒への作文指導の要点をよりの確に表すためには、「言語重視・自己表現重視」に指導方針が変更された実践の内容に関して、従来型の成人日本語学習者への作文指導との相違を明示するとよいのではないか。JSL 生徒に対する「書く」ことの指導には、文章作成という拡散的な問題解決行動そのものへの対応と書き手の発達段階への対応との二つが必要と考えられるので、それらの点からの考察があるとさらにより論考となるといえるだろう。

また、「批判的リテラシー」と「トランスランゲージング」の二つを研究の理論的枠組みとしているが、それぞれと「書く」ことの指導とのかかわり方は異なるものである。それぞれが「書く」ことの指導とどのようにかかわるか、具体的に示したほうが分かりやすく、説得力が増すのではないだろうか。

論考全体からは、四つの実践研究とインタビュー調査によってなされた考察を軸に、JSL 生徒の「ことばの実態」から教師や支援者が生徒の有するリテラシーを多面的に捉えることの重要性がわかる。そして、日本語教育には、複数言語環境で育つ子どものリテラシーを多面的に捉えて「意識化」できるような働きかけが求められていることが理解できるものとなっている。

<本論文の判定>

以上述べてきたように、本申請論文は総じて優れた論考であり、日本語教育学の発展に寄与し得る博士学位論文として認められる。